

**主 題：恵みシリーズ22、死ぬ人は生きる**  
**聖書箇所：ヨハネの福音書 12章20-26節**

今日は、ヨハネの福音書12章20-26節を学んでいきます。この箇所を見る前に、このときどのような状況にあったのかを簡単に説明します。12:1に「イエスは過越の祭りの六日前にベタニヤに**来られた。**」とありますが、過越の祭りが近づいていた、そのような時期でした。「過越の祭り」とはイスラエルの三大祭りの一つです。イスラエルの人々がエジプトから脱出して来たことを記念するものです。また、同時に、主に使いが人々に警告を与えた、そのことも覚えるのです。自分の家の門柱とかもいに小羊の血が塗られていなければ、その家の初子は人間から家畜に至るまで殺されてしまうという、大変恐ろしい戒め、命令でした。そして、その日が来ました。確かに、その家に血が塗られていた場合、その家の初子は助かりました。でも、そうでなかった家の初子は主の使いが言ったように殺された、それを記念する祭りがこの「過越の祭り」です。

その祭りが迫っていたと12:1に記されています。実は、この過越の祭りはイスラエルのニサンの月の14日です。時期的にいうなら、ちょうど今の候、3~4月のことです。このシーズンに毎年もたれている祭りです。この祭りのために多くの人々がエルサレムに集まって来ました。その群衆の中にギリシヤ人たち、つまり、異邦人がいたというのが20節から教えていることです。ヨハネ12:20「さて、祭りのとき礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシヤ人が幾人かいた。」、ギリシヤ人たちはなぜこの過越の祭りに集まって来たのでしょうか？彼らは多分ユダヤ教に改宗していたのでしょうか。もし、改宗していないとしても、彼らはユダヤ教に非常に関心をもっていました。そこで、彼らはユダヤ人たちといっしょになってこの祭りを祝うためにエルサレムに上って来たのです。

続いて、21-22節を見てください。「:21 この人たちがガリラヤのベツサイダの人であるピリポのところに来て、「先生。イエスにお目にかかりたいのですが」と言って頼んだ。:22 ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポとは行って、イエスに話した。」とあります。ギリシヤ人たちがピリポにある要望を出したのです。イエスにお会いしたいという要望でした。そこでピリポはアンデレのところに行って「こんなことを言われたけれどどうしよう？」と言い、二人でイエスのところに行ってそのことを告げたのです。そのときに、イエスが二人に、恐らくこの二人だけでなく大勢の人がいたでしょう。ギリシヤ人たちもいっしょにいたかもしれません。非常に大切なことを言われました。そのことを今日私たちは見ていきます。

イエスは何と言われたのか？23節「すると、イエスは彼らに答えて言われた。「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」、イエスは「時がやって来た」と言われました。これからこのことを見ていきますが、イエスが言われたことは「主イエス・キリストが、神であられる方が、人としてこの世にお見えになったその目的を果たす、その時が来た」ということです。これから見ていくことばは私たちにこんなことを教えてくれます。あなたを愛しておられる主イエス・キリストがどれ程偉大な神であり、どれ程偉大な救い主であるのかということです。そのことを改めて教えてくれます。願わくは、そのことをしっかりと学び、そして、この方にふさわしい感謝をともにささげたいと思います。

**A. イエスは救い主・主である 23, 24節**

イエスはこの23, 24節でご自分がだれなのかを改めて教えておられます。ご自分が救い主であること、ご自分が主権者なる神であること、主であることを人々に教えておられるのです。

**1. 主イエスは救い主 23, 24節**

二つのことばを見てください。23節に「人の子が栄光を受ける」とあります。もう一つは、24節「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びま

す。」です。敢えて、この二つを挙げたのはどちらもあることを教えているからです。それは「イエス・キリストの死」です。イエス・キリストがこの後なさろうとしている私たち罪人の身代わりの死です。そのことについて、この二つの箇所が教えているのです。

### 1) 人の子が栄光を受ける 23節

23節に「人の子が栄光を受ける...」とあります。確かに、福音書を見ていくと、この「人の子」という称号が繰り返し出て来ます。イエスはご自分のことを語るときにこの「人の子」という称号を最も多く使われました。福音書の中には84回も出て来ます。私たちがヨハネ9章を学んだ時に、私は83回と言って数を間違っていましたので、今訂正しておきます。ヨハネの福音書には12節に亘って「人の子」という称号が13回出て来ます。では、「人の子」とはどういう意味でしょう？三つの意味があります。

(1) **メシヤの称号** : ダニエル7:13, 14からそのように言われるのです。「:13私がかた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。:14この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸言語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」。

(2) **主イエス・キリストの人間性と謙虚さを表わす** : 神であるお方がまさに人となられたことです。救世主である神の人間性、また、謙虚さを表わす称号として「人の子」として用いるのです。

(3) **主イエスは王国を築くために、栄光を帯びてこの地上に戻って来られる永遠のお方** : その方を「人の子」と呼んでいるのです。

マタイ24:27, 30, 37, 39, 44「:27人の子の来るのは、いなくが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。...:30そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。...:37人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。...:39そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。...:44だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」、

マタイ25:31「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。」

マタイ26:2, 24, 45, 64「:2あなたがたの知っているとおりに、二日たつと過越の祭りになります。人の子は十字架につけられるために引き渡されます。...:24確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわざいます。そういう人は生まれなかったほうがよかったのです。」...:45それから、イエスは弟子たちのところに来て言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されるのです。...:64イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりに。なお、あなたがたに言うおきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。」

マルコ8:31「それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。」

ルカ19:10「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

使徒7:56「こう言った。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」

これらのことを頭に入れて23節のイエスが言われたことをもう一度見てください。異邦人たちがやって来て「イエスにお会いしたい」と告げたときに、イエスは「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」と言われました。これを聞いていた弟子たち、また、ユダヤ人たちが何を想像したのか？彼らはすぐに先ほど見たダニエル書のことばを思い起こしたはずで、彼らはユダヤ人ですから、聖書を学んでいて、救世主が来ることを待っているからです。ローマによって彼らは苦しい思いを経験していました。一刻も早くそこから解放されたいと願っていた彼らは、そこに希望を置くのです。必ず救世主が来

て、私たちをこのローマから解放してくれると…。先ほど見たように、救世主は地上に彼の王国を築くからです。人の子はそのようなわざを為すと、ダニエル書7：13に「人の子のような方が天の雲に乗って来られ、」と書かれていました。

ですから、イエスが「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」と言われたとき、人々は「やっと待望の救世主がこの地上に王国を築くために来られ、そして、ローマを根絶やしにしてください。ローマに対する勝利をもたらしてください。私たちが待望していたときがやっと来たのだ。」と、そのような宣言をイエスがされたと思ったのです。でも、イエスが言われたことはそういうことではなかったのです。どうしてそれが分かるのか？23節を見てください。日本語ではこのように訳されていますが、実は、原語では意味をもった並べ方がされています。まず、「時が来た」ということばがあって、その次に目的を表わす「～のために」という接続詞が付いています。そして、その後に「人の子が栄光を受ける」と続きます。つまり、23節で主イエスが言われたことは「人の子が栄光を受けるその時が来たのだ」です。人の子が地上に王国を造るためではなく、人の子が栄光を受けるその時が来た、そのことを言われたのです。「人の子」とは主イエス・キリストのこと、つまり、ここでイエスが言われたことは、主イエス・キリスト自身が人々から誉め称えられ、そして、崇められる、その時が来たということです。

よく考えてみると、確かに、イエスはすべてを造られた神ですから、すべての被造物によって誉め称えられて当然のお方です。しかし、ここでイエスが言われたのは「わたしは神だからみなから称えられてしかるべきだ」ではありません。イエスは「これからわたしが為すみわざゆえにわたしは人々から崇められる。」と言われたのです。何のことでしょう？「救い」です。主イエス・キリストがこの地上に来られたのは、私たち罪人のためにすばらしい完全な救いを備えるためです。主イエス・キリストがあなたのために完全な救いを備えてくださる、そして、その救いをいただいた人たちがその救い主である主イエス・キリストを心から崇める、その時が来たと言うのです。ですから、この後、イエスは「死」について話しておられます。12：33を見てください。「イエスは自分がどのような死に方で死ぬかを示して、このことを言われたのである。」、13：1には「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、…」とあります。イエスが繰り返して話されていること、それは「死」についてです。王国のことではなかった、ご自分の「死」についてです。主イエス・キリストの十字架の死と、約束通りその死後三日目によみがえって来た復活と、そして、天に凱旋していかれたこと、このみわざによって私たちにすばらしい救いが備えられたのです。完全な救いが備えられました。どんな罪人でも赦していただける、その救いが完成したのです。

イエスはそのみわざを成し遂げるその時が来たと言われたのです。24節のみことばを見ると、そのことを別の表現をもって説明しておられます。

## **2) 一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみならず、豊かな実を結びます 24節**

24節「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみならず、豊かな実を結びます。」、23節でも見たように、イエスが言われたことは「死」についてです。ご自分がこの後死ぬということです。その死についてこの24節では「種」のたとえをもって話しておられます。「わたしの死はわたしを信じる者たちに永遠の祝福をもたらす」、それはちょうど、一粒の麦が地に落ちて実を結ぶことと同じだと、イエスはこの麦のたとえをもって祝福のことを話されるのです。ご自分の死によって人類に最高の祝福をもたらすことを教えられたのです。麦は米と同じように外皮、もみ殻があります。もみ殻に包まれています。それを地に蒔くと条件が整うなら発芽します。水分、温度、空気が必要です。

この麦を地に蒔くと外皮は腐って分解しますが、その中から種子が胚芽から芽が出て来ます。外皮が

まさに死んでいくのです。死によって私たち人間のからだは時間の経過とともに腐っていきます。ですから、イエスはご自分の死と、みながよく知っている麦のことを出して、確かに、死を経験するが、その死によって素晴らしい祝福がもたらされると言われたのです。麦が死ななければ収穫を期待することはできません。外皮が死んでもそこから芽が出て来て穂を实らせて収穫を楽しむことができる、同じように、わたしが死を迎えることによって、その後、わたしは素晴らしい祝福をわたしを信じる者たちに与えると、そのことを話されたのです。

イエスが言われていること、それはご自分が人々にもたらす素晴らしい祝福、「救い」について、当時の人たちが最もよく分かるたとえをもって、ご自分の死と、その死後もたらされる素晴らしい祝福を話されたのです。よく考えてみると、このイエス・キリストの死によってもたらされた祝福、救いは人種を越えています。ユダヤ人であろうとそうでなかろうと、この社会の違いや年齢も性別も全く関係なく、主イエス・キリストのもとに救いを求めて来る者に、神は完全な救いを与えてくださる。そして、すべての人がキリストにつながり、神の家族とされる、「こんな素晴らしい救いをわたしは与えるのだ。でも、そのためにはわたしは死ななければならない。そして、死んだ後、よみがえることによって、この救いをあなたがたにもたらす。」と、そのことをイエスはここで言われたのです。

この主の贖いによる救いによって、私たちはこうして死んでも生きるという希望をもって生きることができます。それは私たちクリスチャンだけです。確かに、この肉体は日々衰えていきます。しかし、私たちはその先を待望しています。

皆さんにお話ししたように、この度の母の召天で何通かのカードが届きましたが、海外のカードは素晴らしいです。書かれているメッセージが素晴らしい、日本語ではこのようにはならないと思うし、日本にはこんなカードは売られていないだろうと思います。クリスチャンとして素晴らしいメッセージが印刷されているカードが送られて来ました。それを読んで、確かに、地上では寂しいけれど天国ではみな喜んでいて、いろいろなことを思い出して考えていました。愛する者との別れに寂しさはあっても、その愛する者はこの地上よりもずっと素晴らしいところに招かれたと。こんな希望をもって生きることが出来るのは私たちだけです。それもすべて主イエス・キリストが死んでくださったからです。主イエス・キリストがあなたの身代わりとなって十字架で死んでくださらなければ、私たちはこのような希望をもって生きることができないのです。いや、たとえその希望をもっていたとしても、死んだ後、それが現実でなかったなら失望するでしょう。しかし、私たちが死を迎えたときに、これはただの希望ではなく事実であったことを私たちは確信します。主イエス・キリストのもとに私たちは招かれて、私たちはこの方を拝してこの方に感謝をささげるのです。恐らく、皆さんもそのときを想像して待望されているでしょう。

でも、神に感謝をささげるのは天にいつからではありません。今です。だから、イエスは言われたのです。「**人の子が栄光を受けるその時が来ました。**」と。主イエス・キリストは栄光を受けるにふさわしいお方です。イエスはすべての人々から誉め称えられて当然のお方です。なぜなら、こんな素晴らしい救いを完成してくださったからです。それが出来るのは救いに与っている私たちです。それが今この地上に置かれている私たちに主が求めておられることです。「感謝です、神さま！」とそのように私たちは神に感謝をささげながら、この方を誉め称えながら生きていくのです。まさに、この素晴らしい救いを成し遂げるその時が来たと、異邦人であるギリシャ人たちが主イエスに関心を示している様子をご覧になって、まさに、「その時」、ユダヤ人と異邦人を一つにする「救いの時」が来たことを告げられたのです。

天使たちもこの主を誉め称えている様子が黙示録に書かれています。黙示録5：11、12「:11 また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。:12 彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」と。数え切れないほどの多くの天使たちがこのように大声で神を称

えるのです。「ほふられた小羊」は主イエスのことです。こうして天使たちは神を誉め称えていると。私たちもこの賛美に加わるべきです。もちろん、後には天にあってそうします。でも、今この地上にあってそのようにするのは。救われた私たちはもっと声を大にして、この救いのすばらしさ、そして、この救い主のすばらしさを心から誉めた称えることです。

まず、そのことを私たちはしっかり覚えるのです。

## 2. イエスは主 23節

イエスはいったいだれなのか？「救い主だ」ということを確かにこのみことばは教えています。もう一つ、「イエスは主である」と教えているのでそれを見ましょう。イエスは「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」と言われました。皆さん、思い出しませんか？イエスは何度も「時はまだ来ていません。」と言われていました。

ヨハネ2：4 カナの婚礼の場所で、主イエス・キリストは自分の母マリヤから「ぶどう酒がありません。」と言われたとき、イエスはこのように言われました。「すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」

ヨハネ7：6、30 イエスの兄弟たちが「もっと自分を公にしたらどうだ。」と言ったときに、「:6そこでイエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも来ているのです。」と答えておられます。また、人々がイエスを捕えて殺そうとしましたが、彼らは捕えることができませんでした。「:30そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、しかし、だれもイエスに手をかけた者はなかった。イエスの時が、まだ来ていなかったからである。」

ヨハネ8：20 「イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。」

彼らはみな「自分がいったいだれなのかを人々の前に示したらどうか？」と言いました。でも、イエスは「まだその時ではない」と言われたのです。確かに、イエスは「わたしの時はまだ来ていない。」と言われました。イエスを捕えようとしてもだれもイエスを捕えることができなかったのです。「イエスの時がまだ来ていなかったから」です。イエスご自身も「私の時はまだ来ていません。」と言われていました。ところが、23節には「わたしの時は来た」と言われたのです。これは何を意味しているのでしょうか？

### \*主は「時」を支配しておられる

ということです。偶然に起こっているのではありません。すべてのことをコントロールされている方、すべての主権者だということです。ヨハネ19：10、11に「:10そこで、ピラトはイエスに言った。

「あなたは私に話さないのですか。私にはあなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのですか。」:11 イエスは答えられた。「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに渡した者に、もっと大きい罪があるのです。」と書かれています。どんなときにも主のみこころが成されます。主が主権者だからです。こうしてイエスは「わたしの時が来た」と言われ、ご自分のみこころに沿ってすべてのことが進んでいる、すべてのことを支配している主権者なる神だということをここでも明らかにされたのです。

## B. 主イエスの弟子 25、26節

### 1. 主イエスの弟子となる 25節

次に、イエスは人々に対してこのようなことを言っておられます。25節「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。」、イエスはご自分の死をもって備える完全な救いのことを話して来られましたが、この救いをどうすれば自分のものにすることができるのか？そのことを話されるのです。「救い」のことです。イエスはここで大切なことを言われます。皆さんもお気づきになったことと思いますが、24節でご自分の死について話され、それと同じことを私たち人間に、罪人に対して語っておられるということです。

この25節のメッセージは救いへのメッセージです。イエスが言われたことは「**自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。**」です。問題は何か？永遠のいのちを得るためにどうするのか？自分のいのちを憎むことだと言うのです。イエスが言われたことはこういうことです。

**\*あなたはこの世のいかなるものよりも、あなた自身よりもわたしを愛しますか？**

と問われたのです。あなたはそれにどのように応答されますか？イエスは言われました。「**自分のいのちを愛する者は**」と、これは自分の健康を守るということではなく、神以上に自分のいのちを愛するならば、あなたが求めている永遠のいのちを得ることはないということです。「**この世でそのいのちを憎む者は**」とは、自分のいのちを憎んで、生まれたことを憎んで「生まれなかった方がよかった」と自己憐憫に陥ることはありません。自分のいのちを神よりも大切なものにしないということです。

イエスがここで言われていることはそういうことです。あなたにとって一番大切なものは何ですか？と問われたのです。当然、私たちにとって一番大切なものは、私たちを造ってくださり私たちを生かしてくださっている神です。この神が「これまで！」と言われたなら私たちは終わりなのです。よく考えてみるなら、あなたが今、すばらしい天国が約束されたと言っているのは、あなたがすばらしい人だからではありません。すばらしい人だから、人々に愛されているから神は天国を約束されたのではありません。神に逆らい続けて来たあなたを神が一方的にそこから救い出してくださった、これは神の恵みです。そうすると、私たちにとって「だれを一番に愛するべきなのか？」は明らかです。

生まれながらの私たちは、残念ながら、私たちを造ってくださってこんなにも愛してくださっている神を愛してはいませんでした。自分を愛していました。自分が一番大切でした。しかし、私たちはそれが間違っていたことに気付いたのです。そして、私たちは「神さま、私はあなたに対して大きな過ちを犯して来ました。私を造ってくださり私を生かしてくださり、こんなに私を愛して、こんな私のために完全な救いを備えてくださったこと、そのためにご自身のひとり子イエス・キリストを殺してまでその救いを備えてくださった、その神であるあなたを無視して生きて来ました。神を愛していなかった証拠は、神が喜ばれることをして来なかったし、却って、神が憎まれることを喜んで選択して来ました。主よ、どうぞ、私を赦してください。私の歩みは間違っていました。私は私を造ってくださり生かしてくださり、こんなにも愛してこのすばらしい救いを備えてくださったあなたを信じてあなたに従っていきますから、どうぞ、私を赦してください。神さま、あなたは私を罪から救うために、ひとり子イエスさまを送ってくださり、その方を私の身代わりとして殺し、その方が死から敢然とよみがえることによって、この方が救い主であること、私たち人類の唯一の希望であることを明らかにしてください。この犠牲によって備えられたこの救いを私は心から信じ受け入れます。どうぞ、私を救ってください。私を赦してください。」と、あなたが心から救いを求めるなら、神はあなたを赦して救ってくださるので

す。

そのときに、一人ひとりがよく考えなければいけないこと、それは、イエスの弟子になるということは、つまり、この救いに与るということは、先ほどから見ている質問にあなた自身が答えなければならぬということです。あなたはいったいだれを一番に愛するのか？です。今話したように、私たちのこれまでの生き方は自分でした。そうして神に逆らって来ました。ですから、みことばを見たときに、繰り返して「自分を捨てる」ということを私たちに教えています。マタイ10：37には「**わたしよりも父ですや母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。**」と、非常に厳しいことをイエスは言われました。でも、これはあなたの両親を愛してはいけないということではないし、あなたの子どもたちを愛してはいけないということではありません。彼らは私たちが当然愛すべき人たちです。でも、神が言われたことは「その愛する親よりも子どもたちよりもわたしを愛するか？」です。

それがこの25節でイエスが言われたことです。もし、あなたがこの救いを自分のものにしようとするなら、あなたに必要なことは「あなたよりもわたしを愛することだ」と。だから、皆さん、旧約聖書に一番大切な戒めとして「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。」

(申命記6:5)と見ます。心からあなたのすべてをもって主なる神を愛することです。新約聖書ではイエスは律法学者に答えておられます。マルコ12:28-30「:28 律法学者がひとり来て、その議論を聞いていたが、イエスがみごとに答えられたのを知って、イエスに尋ねた。「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。」2:29 イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。:30 心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』と。旧約聖書でも新約聖書でも、神が言われていることは全然変わっていません。「あなたはわたしを愛しますか？」と問われているのです。神はあなたを主イエス・キリストの犠牲によって愛してくださった、あなたはどうか？と。神よりも何か他のものを愛すること、まさに、それは偶像ですが、そのあなたの選択、あなたの生き方は神に喜ばれるものではありません。

神が問うておられることは「わたしはこれだけのものをもってあなたを愛したけれど、あなたはどうか？」です。「私は答えます。神さま、あなたが一番ですと。友だちもいます。愛する親も家族もいます。彼らを愛しています。でも、あなたは私を造り、そして、私にとって一番必要な救いを与えるために、ご自分のいのちまで捨ててくださった。あなたを愛します。神さま、そのように決心しても失敗だらけですがあなたを愛します。あなたを愛して、もっとあなたに喜ばれたいと願っていながら、私の歩みはそれに反することが多過ぎます。情けないですが、それでもあなたを愛しています。」と、そのような信仰者がこの中にもたくさんおられることでしょう。感謝です。神はあなたの心をご存じです。

イエスとペテロの会話を思い出してください。主はペテロの心をご存じでした。彼には学ばなければいけないレッスンがありました。プライドでした。自分で出来る！と。でも、そのプライドが砕かれたときに「主よ、あなたはいつさいのことをご存じです。」と言いました。私たちが偉そうなことを言えるような信仰者ではありません。でも、感謝なことは、神は私たちの心を見ておられます。イエスは言われました。「あなたはいったい何を愛するか？あなたの愛するものよりも、あなた自身よりもわたしを愛するなら、あなたが求めているものをわたしはあなたに与えよう。でも、わたしよりも他のものを愛しているなら、あなたが求めているものを与えることはない。」と。

24節でイエスが言われたことは「いのちを捨てることによって祝福をもたらす」です。私たちが自分を捨てることによって主の祝福をいただくのです。

## 2. 主イエスの弟子として生きる 26節

26節には、主イエス・キリストの弟子となった者たち、その人たちに対してどのように生きていくのが記されています。「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。」、イエスを信じるということがここでは別のことばで表現されています。それは「イエスについていく」ということばです。

### \*イエスについていくという決心こそ、救いへの決心である

どうしてそのように言えるのか？実は、このことばは頻繁に出て来ます。新約聖書には90回も見られます。いくつかだけ挙げます。皆さんよくご存じの箇所です。

マタイ19:27 「そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるのでしょうか。」

マルコ8:34 「それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

マルコ10：28 「ペテロがイエスにこう言い始めた。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」

ルカ5：11 「彼らは、舟を陸に着けると、何もかも捨てて、イエスに従った。」

ルカ9：23 「イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

イエスは漁師たちに「わたしについて来なさい」と言われました。彼らは「...何もかも捨てて、イエスに従った。」とあります。「従う」とは「ついていく」ということです。また、マルコ8：34でも「...ついて来なさい。」と言われました。これは現在形の命令です。もし、あなたが本当にわたしについて来たいと思うなら、わたしの弟子になりたいと思うなら、あなたがすることはわたしについて来ることだと言われます。マタイ19：27ではペテロが「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」と言っています。彼らが告白したことは「イエスさま、私たちは世のいかなるものよりもあなたを大切に、あなたを愛してあなたに従って来ました。」です。ペテロにとって、主イエス・キリストを信じた弟子たちにとって共通していたことは、主イエス・キリスト、神を何よりも愛したということです。

そして、彼らはあることを決心したのです。私たちは神に逆らって来たこれまでの生き方を止めて、この方に従うという神が計画されている、神が望んでおられる正しい生き方を始めていきたいと歩み始めたのです。これが弟子たちです。これが救われた者たちです。だから、皆さんは失敗しながらも主に継続して従って行こうとするのです。どうぞ、立ち止まらないでください。感謝なことに、神は私たちの心をご存じです、同時に、私たちの弱さ愚かさもご存じです。あなたがそのように主を信頼して従い続けていくときに、神はあなたを喜びあなたを祝してくださるのです。主が教えてくださるみことばの真理に従って行こうとするときに、主はあなたを大いに祝して用いてくださるのです。自分を余りにも責め過ぎて「私はだめなんだ、私は主によって用いられる価値もないから」と、誤った結論を引き出さないことです。神はあなたを用い続けてくださいます。

私たち信仰者は「主に従って行く決心をした者」です。しっかりと神のみことばに従い続けていくことです。主はあなたを大いに祝してあなたを用いてくださる。ですから、そのことが26節に書かれているのです。

### 3. 主イエスの弟子への約束 26節

#### \*主イエスの弟子はわたしに仕える者、すなわち、奴隷である

そのように生きるあなたに対する神からの祝福です。26節に「わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。」とあります。「わたしに仕える者」と、これはイエスの弟子のことです。もっと言うなら、主イエス・キリストの奴隷のことです。何度も学んでいるように、私たちクリスチャンは主イエス・キリストの奴隷なのです。罪の奴隷であった者が神の奴隷として生まれ変わったのです。ですから、私たちが望んでいることはただ一つです。この主人である神を何とか喜ばせたい、私のことばも私が為すことも考えることも、すべてを通して神に喜んでいただきたい、それが正しい奴隷の生き方です。こうして、私たちは主に仕える者、主の奴隷であると、そのことを教えています。

#### ◎奴隷への約束

##### 1) 天

「わたしがいる所に、...いるべきです。」と言います。つまり、イエスがおられるところにあなたがたも招いてくださるといなのです。天国のことです。ヨハネ14：3に「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」とあります。イエスはここでも言われているのです。主イエス・キリストの奴隷として主に従い続けている私たちを「わたしのいるところに迎えます」と。主イエス・キリストは今、父なる神の右に着座されています。栄光の中におられます。そこに私たちを招いてくださるのです。それがまず、祝福の



一つとして記されています。何度も言うように、私たちは死んでも生きる、なぜなら、この約束が私たちのものだからです。

## 2) 報い

また、「もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。」とあります。神からのご褒美があるということです。

(1) 動機 : でも、その褒美をいただくために私たちが覚えなければいけないことは、どんな動機で主に仕えているかということです。そのことを忘れてはいけません。Iコリント9:16, 17

「:16というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならぬことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったなら、私はわざわざい。:17 もし私がこれを自発的にしているのなら、報いがありましょう。しかし、強いられたにしても、私には務めがゆだねられているのです。」、

IIコリント9:7「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」

(2) 祝福 : さて、どのような報いを神は約束されているのか？見てください。よく私たちが見る箇所です。マタイ25章です。イエスはここで、5タラント、2タラント、1タラントをそれぞれのしもべに預けて旅に出た主人のことを話しておられます。主人が戻って来たとき、5タラント預かっていたしもべがさらに5タラントもうけていたので、このように言っています。「:21 その主人は彼に言った。

『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』、実は、このことは23節でも繰り返されています。この箇所が私たちの教える三つの報いは、

### a) 神ご自身があなたを誉めてくださる

あなたが主イエス・キリストの前に立つとき、主ご自身があなたを誉めてくださるのです。「よくやった。良い忠実なしもべだ。」と。この「忠実なしもべ」とは「信頼のできる、頼りになる、当てになる」ということばを使っています。そのようなことばを神ご自身が私たちに掛けてくださるのです。あなたは信頼に値する者だ、わたしが信頼を置く者だと。だから、二つ目の報いがあるのです。

### b) 天においてより大きな責任が与えられる

地上でも私たちはすべてのことを主に仕えるために、主のためにやっています。では、天においては何をするのか？私たちは主に仕え続けるのです。この地上にあって私たちが主に仕えているとき、私たちは心が喜びに満たされます。天においてはそのことをずっとするのです。でも、みことばが教えることは、あなたはどのような大きな責任をいただくのか？どのような大きな働きをいただくのか、それはすべてこの地上におけるあなたの歩みに掛かっているということです。この地上において、クリスチャンとしてのあなたの歩みが忠実なら、主はそのような務めを天において与えてくださるのです。

### c) 主の喜びのうちに入れられる

「主人の喜びをともに喜んでくれ。」とありました。感謝なことに、神の喜びのうちに私たちが招かれて私たち自身がその喜びをもって生きることが出来ます。だから、天に行ったときに、私たちはどんなに喜びに溢れていることでしょうか？みな喜びに満ち溢れ、みな神を賛美し、みな神を喜んで心から仕え続けているのです。すべて、神の栄光のためにです。

確かに、みことばは「主人の喜びをともに喜んでくれ。」と記していてこれは将来のことです。でも、みことばを見ると、その主イエス・キリストの喜びはもうすでに私たちのうちに与えられているということです。確かに、天国では喜びに溢れて主を称えるのですが、地上にあって私たちがそのようにするのは。なぜなら、私たちにはその喜びが与えられているからです。

信仰者の皆さん、救いに与った私たちはもうすでに天国民として生まれ変わったのです。天国であることを私たちは今この地上でやっているのです。そのために、神は私たちにその約束を与えてくださ

たのです。平安をくださった、その祝福をもって私たちは今日を生きることができる者へと生まれ変わったのです。そのように生きることによって私たちは人々の前に、救われたことがどんなに素晴らしいことかを証するのです。そして、その証を通して、この救いをご自分のいのちを犠牲にして備えてくださった方に栄光がいくのです。

そのように生きなさいと、確かに、素晴らしい約束が将来にあります。でも、今日私たちがどのように生きるかです。この人たちが誉められたのは、彼らが神の命令に対して忠実であったからです。確かにそうです。でも、彼らが誉められているのは、このような忠実な行ないを生み出した彼らの心です。どんなに忠実に生きていても、心が正しくなければ意味がありません。心が正しければ正しい行ないが生まれて来るのです。だから、信仰者である私たちは自分の心をしっかりと吟味することです。私たちの歩みが正しいかどうか？私たちの主に仕えているその日々の生活が正しい心から生み出されているかどうかです。どうぞ、信仰者として、この祝福に与った者として、あなたの日々の生活が感謝を現わすものになるように、あなたの日々の生き方が素晴らしい救いをくださった主イエス・キリストの栄光を現わすものとなるように、それを願って、それを可能にしてくださる神に助けをいただきながら生きていきましょう。そのことを神は私たちに命じておられます。主が私たちひとり一人を助けてくださるように、そのことを祈ります。

#### 《考えましょう》

1. 「栄光を受ける時」について説明してください。
2. 「主イエスの死」が、どうして大切なのかを記してください。
3. 「自分のいのちを愛すること」が、主に喜ばれないのはどうしてですか？
4. 「主に仕える」ことにおいて大切なことは何ですか？  
また、それはどうしてですか？